“Thou Stick’st a Dagger in me”

――*The Merchant of Venice* についての一考察 ――

村上世津子*

（平成 16 年 10 月 29 日受理）

“Thou Stick’st a Dagger in me”: A Study of *The Merchant of Venice*

Setsuko MURAKAMI*

Despite the fact that *The Merchant of Venice* refers not to Shylock but to Antonio, Shylock has attracted the audience and readers of *The Merchant* more than any other character in the play. Shylock has been described variously from “a comic villain” to “a scapegoat.” One critic even describes his role as “peripheral.” However, without the confrontation between Antonio and Shylock which climaxes at the court scene, the play would collapse.

There are many causes which make Shylock seek Antonio’s life. Among them is Jessica’s elopement. What is important with her elopement is not only Salarino and Solanio tease Shylock with her elopement but even Tubal, a Jewish usurer, torments him with her conduct.

Without Tubal’s scene, Shylock’s attempted murder would only be a fruit of either an ideological conflict between Judaism and Christianity or Shylock’s rivalry against Antonio on business. Because Tubal torments him, however, Shylock’s suffering shifts from a social problem to an individual problem. Shylock’s defeat at the end of the trial scene appeals to us because by shedding light on the inside of Shylock, the scene with Tubal turns him from a champion of the Jew to “one of us.”

key words: Tubal, Shylock, Antonio

はじめに

The Merchant of Venice はユダヤ人の高利貸し Shylock ではなく Antonio を指すとは言うものの, Shylock は他の登場人物以上に *Merchant of Venice* の観客や読者の興味をひきつけてきた. Shylock の解釈は上演史では George Granville の “a comic character”, Macklin の “menacing enemy”, Irving の “a man more sinned against than sinning”の解釈を経て 1900 年頃までには “a tragic hero”としての Shylock 像が観客の脳裏に刻まれるようになった. [1)]最近では Lawrence Olivier が “confident arriviste”としての Shylock

* 英文学　助教授

を演じている．[2]また，批評史では 1911 年に Stoll が “comic villain”,[3] 1951 年に Goddard が“leaden casket with the spiritual gold within”[4] 1965 年に Tillyard が “simple embodiment of the power of evil”[5] 1972 年に Fiedler が “ogre”,[6]1980 年に Girard が “scapegoat”[7]と解釈するなど多様を極めている．なかには Shylock の役割は “peripheral”[8]だとする解釈(1985 年)もあるが人肉裁判で頂点に達する Antonio と Shylock の対決なくしては *The Merchant of Venice* という戯曲が成立し得ないことは否めない．

Shylock を Antonio と対決させ，ひいては彼を敗北させる要因はいくつかある．まず Shylock がクリスチャン社会に生きるユダヤ人[9]，しかも高利貸しという当時の人々が蔑みつつも経済生活を送る上で無視できないきわどい存在[10]であることが挙げられる．次にお金を貸して利益を得ることは聖書の教えに背くから困窮者に無利子で金を貸して Shylock の仕事の邪魔をする Antonio の正義感，さらにはその正義感に裏打ちされた Antonio のあからさまな Shylock 蔑視が挙げられる．特に友人の Bassanio が Portia の心を射止めるための準備金を工面するために Shylock から金を借りることを余儀なくされたときでさえ, Shylock を軽蔑するのみならず, “But lend it rather to thine enemy,/ Who if he break, thou mayst with better face/ Exact the penalty.”[11]という Shylock の敵愾心を挑発するような言葉を吐くことは重要な要素である．他方 Shylock について言えば，もともと Antonio に激しい憎悪を抱いていて折りあらば恨みを晴らしたいと思っていたことや, Shylock の人肉の契約の提案が軽い冗談を装っていたので Antonio がついだまされたことが挙げられる．１番大きな要因はもちろん Antonio の予測に反して彼の船が難破し，証文の期限が切れてしまうことである．これらの要因に加えて Shylock が実際に裁判を起こして Antonio の肉１ポンドを取ろうとする前に彼の娘の Jessica が命の次に大事な彼の金を奪ってクリスチャンの恋人 Lorenzo と駆け落ちすることも見逃せない．この事件が Shylock に与えた打撃は Antonio と Bassanio の共通の友人である Salarino の “Let good Antonio look he keep his day,/ Or he shall pay for this.”(2. 8. 25-26)という言葉が示唆している．もしこの事件がなければ Shylock はあれほどまで頑なに Antonio の命をつけ狙わなかったかもしれない．Jessica と Lorenzo の駆け落ちについては多くの批評家が言及しているがこの事件について些細に見えるが重要なことは Salarino と Solanio だけがこの事件に言及し Shylock のささくれ立った心をより一層かき乱すのでなく，Shylock と同業者のユダヤ人の Tubal までもがその事件に言及することである．Solanio と Salarino だけでなく Tubal にも言及させることにはどんな意味があるのか．本稿は Tubal の役割に焦点を合わせて彼の言葉が Shylock に与えた影響，ひいては *Merchant of Venice* の中における Tubal の役割について考察したい．

I

Jessica と Lorenzo の駆け落ちが Shylock に与えた影響について考える前に Shylock の性格を概観したい．Shylock の性格についてまず挙げられるのは守銭奴であることと一切の喜びを殺す kill-joy であることである．高利貸しという職業柄，利益のために金を貸

すのはやむを得ないにしても，気が進まぬにもかかわらず Shylock が Bassanio の招待を受けて宴席に出かけていくのは “to feed upon/ The prodigal Christian”(2. 5. 14-15)するためである． 召使の Lancelot が Shylock 宅の処遇に我慢できずに暇乞いをしたときにも彼が去っていく理由を Jessica に “part with him/ To one that I would have him help to waste/ His borrowed purse”(2. 5. 47-49)と説明する． 彼の信条は “Fast bind, fast find”(2. 5. 52)という諺に凝縮されている． 金第一主義という彼の生活信条が最もよく表現されているエピソードは娘が彼の財産を持ち逃げしてクリスチャンの恋人と駆け落ちしたのを知ったときに Shylock が娘の駆け落ちと大金の持ち逃げを等価と考えるのみならず，“Why thou loss upon loss—the thief gone with so much, and so much to find the thief”(3. 1. 72-73)と嘆くことである．

Shylock は金にこだわるあまり他者との親交を粗略にするだけではない． 彼は楽しさや息抜きそのものをも敵視する． 「美しい調べにも心を動かされない」どころか Shylock は “the drum/ And the vile squealing of the wry-necked fife”(2. 5. 29-30)が “my sober house”(2. 5. 35)の中に入らないように “stop my house's ears”(2. 5. 33)するように Jessica に命ずる． Jessica が言うように Shylock の家は喜びのかけらも見つけられない “hell”(2. 3. 2)であり “a merry devil”(2. 3. 2)である Lancelot が去った後は息も詰まる暗黒でしかないように思える．

とは言え Shakespeare は Shylock を全く血の通わない “monster”に仕立て上げているわけではない． 彼を捨てて新しい主人の元に行く Lancelot のことを Shylock は “The patch is kind enough”(2. 5. 44)と認めているし，暇乞いをする Lancelot に対して言う Shylock の言葉 “thou shalt see. . . The difference of old Shylock and Bassanio. . . Thou shalt not gourmandise/ As thou hast done with me. . . And sleep, and snore, and rend apparel out”(2. 5. 1-5)は強がりではあるが，召使に去られることの寂しさが滲み出ている言葉でもあると言えよう． 娘の駆け落ちについても同様のことが言える． Shylock が娘の駆け落ちと財産の持ち逃げを等価と見なすことは娘に対する愛情が低いことを示しているが，それでも「盗人に大金を使い埋め合わせもできん」とこぼしつつも娘を捜さずにはおられないことは娘に対する愛情が存在していることを示している． 同様に“I would my daughter were dead at my foot, and the jewels in her ear: would she were hearsed at my foot, and ducats in her coffin.”(3. 1. 69-71)というセリフはいかにも金のためなら娘の命をも犠牲にするおぞましさを表しているように思えるが，娘と一緒に財産まで棺桶の中に入れたいということはそれだけ Shylock が混乱していることを示唆している． 自分の「骨肉」の謀反 [12]であるからこそ娘の裏切りは Shylock に計り知れない打撃を与えるのである: “My own flesh and blood to rebel!”(3. 1. 28)そしてもちろん多くの批評家が指摘するところであるが Shylock の次のセリフはクリスチャン社会に住むユダヤ人の悲しみを観客の心に訴えかける：

> He hath disgraced me, and hindered me half a million, laughed at my losses, mocked at my gains, scorned my nation, thwarted my bargains, cooled my friends,

heated mine enemies—and what's his reason? I am a Jew. Hath not a Jew eyes? Hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? Fed with the same food, hurt with the same weapons, subject to the same diseases, healed by the same means, warmed and cooled by the same winter and summer as a Christian is? If you prick us, do we not bleed? If you tickle us, do we not laugh? If you poison us, do we not die?"(3. 1. 43-52)

「いい人でない」という評判を聞いたことがないくらい紳士中の紳士だとされている Antonio でさえ Shylock のことを"misbeliever"(1. 3. 103)や "cut-throat dog"(1. 3. 31)と呼び, "spit upon my Jewish gaberdine"(1. 3. 104)し, "foot me as you spurn a stranger cur over your threshold"(1. 3. 110-111)し, 法廷の場面で有名な慈悲の意義を説くセリフを述べ慈悲の象徴と考えられかつ父の遺言による箱選びで外観より内面を重んじるテストに合格した求婚者との結婚を義務付けられている Portia でさえも Morocco からの求婚について "If he have the condition of a saint, and the complexion of a devil, I had rather he should shrive me than wive me"(1. 2. 104-106)と言ってはばからないことを聞かされてきた観客や読者は Shylock の言葉にクリスチャン社会に生きる異邦人の苦しみの大きさを感じさせられる. しかしこれら以上に Shylock の人間性を訴えかけるのは指輪を交換したことをユダヤ人仲間の Tubal から聞かされたときの Shylock のセリフである. 事項以降そのセリフを中心に Tubal と Shylock の会話を考察したい.

II

"Hath not a Jew eyes?"というセリフはユダヤ人も痛みを感じる存在であることを読者や観客に訴えかけて共感を引くものの, そこから引き出される結論は復讐の正当化にしかつながらない[13]のに対して, 次に引用する Tubal と Shylock の会話は若く純粋であった頃の Shylock と恋人のほほえましい過去を髣髴させる[14]とともに, 死んだ妻に対して Shylock が今なお愛情を抱き続けていることを示唆する：

Tubal: One of them showed me a ring that he had of your daughter for a monkey.
Shylock: Out upon her! Thou torturest me, Tubal: it was my turquoise, I had it of Leah when I was a bachelor. I would not have given it for a wilderness of monkeys. (3. 1. 93-97)

だから Jessica が Leah の指輪を猿と交換したことは "figuratively undoing the parents' marriage and denying the mother's token of love and fidelity"[15]を意味する. ここで Jessica が猿と交換したものが指輪だということもまた意味がある. Leah の指輪を含め, この劇には指輪が３こ登場する. [16]見事 Portia の肖像が入っている箱を引き当てたときに Bassanio は邸と召使と彼女自身とのすべてに添えて Portia から指輪を受け取るし, Gratiano も Nerissa から指輪を受け取る. Bassanio はその指輪を決して人にやったり,

なくしたりしないという約束をした上でそれを受け取り, Gratiano も Nerissa に同様の約束をする． しかし Bassanio は彼の求婚資金を調達するために保証人となったが期限内に借金を返済できなかったのであわや Shylock に殺されるところであった友人 Antonio の命の恩人である Portia 扮する Dr. Balthazar に妻からもらった指輪をあげる． そして Gratiano も同様に Nerissa 扮する博士の書記に指輪を上げる． もちろん猿１匹と交換した Jessica と異なり Bassanio が Portia からもらった指輪をあげるのは友人の命を救ってくれた博士に求められ, 友人にも懇願されたからであるし, 一度は断ってもいる． それに "I would not have given it for a wilderness of monkeys."という Shylock のセリフは逆に言えばそれより価値の高いものとなら交換するかもしれないということを示唆しているし, そもそも亡き妻の記念の品と大群の猿が等価であると考えること自体が問題であるとも言える． Bradbrook が指摘するように, そのような夫婦愛の告白ゆえに周到な Antonio 殺し計画が許されるわけでない [17]ことはもちろんである． しかし親友の命を救うためなら妻を犠牲にすることも厭わないと法廷の場で言明する Bassanio や Gratiano のセリフと彼らの夫婦愛に疑問を投げかける Shylock のセリフをあわせて考察するときに読者や観客はたといどんなに限定された未熟なものであるにしても, Shylock の中には妻に対する愛情が確かに存在することに気づかされる：

Bassanio: Antonio, I am married to a wife
Which is as dear to me as life itself;
But life itself, my wife, and all the world
Are not with me esteemed above thy life.
I would lose all, ay, sacrifice them all.
Here to this devil, to deliver you. (4. 1. 278-283)

Gratiano: I have a wife who I protest I love;
I would she were in heaven, so she could
Entreat some power to change this currish Jew. (4. 1. 286-288)

Shylock: These be the Christian husbands! I have a daughter:
Would any of the stock of Barabbas
Had been her husband, rather than a Christian! (4. 1. 291-93)

だが Tubal と Shylock の会話の意義は Shylock に潜在する愛情を呈示するだけではない. むしろこの場面で前面に押し出されているのは Shylock があたかも操り人形であるがごとくに Tubal の意のままになっていることである． Tubal は Antonio の大型船が難破した知らせで Shylock を喜ばせた直後に Jessica が Shylock から盗んだ金を散財している話をして Shylock を苦しめ, Shylock が苦しむさまを見てまた Antonio の話に戻り「あの男も破産するしかないだろうとみんな言っていた」と言って Shylock を有頂天にさせた後 Jessica

が Shylock の妻の形見の指輪と猿１匹を交換した話をして Shylock を責めさいなむ. Barber は Shylock が Tubal の思いのままに操られているから読者は Shylock の感情の起伏を見て滑稽に思うと指摘し，[18]Palmer も同趣旨のことを指摘している. [19]しかし果たして Barber や Palmer の主張するようにこの場面の Shylock を見て観客は笑うことができるだろうか. 笑い飛ばすには Shylock の苦しみ方があまりに激しすぎる. 特に娘がトルコ玉の指輪と猿１匹を交換した話を聞かされたときの Shylock の反応は娘に対する怒りと妻への愛情と彼の苦しみが渾然となって読者や観客の胸に迫り，とても笑い飛ばすことはできない.

Antonio や Gratiano に悪態をつかれても "suff'rance is the badge of all our tribe"(1. 3. 102)だから Shylock は肩をすくめてじっと我慢することができただろう. Shylock なりに目をかけていた Lancelot に去られたときに Shylock は強がりを言っても寂しさを感じたことだろう. "my own flesh and blood"である娘が彼の財産を持ってクリスチャンと駆け落ちしたとあっては Shylock が取り乱すのも無理はない. しかし Solanio が指摘する通り "the bird was fledged"(3. 1. 24)であるから Jessica が Shylock の家を出るのはある意味で当然至極な自然の摂理である. しかも "There is more difference between thy flesh and hers than between jet and ivory"(3. 1. 31)だから身を引き裂かれる思いをしても Shylock は最終的には娘の駆け落ちを認めなくてはいけない. [20]しかし Tubal は Shylock と同じユダヤ人で Shylock と同様に高利貸しで生計を立てている Shylock から見ればまさに "our tribe"(1. 3. 102)の仲間であるべき人物である. 信頼できる，気の置けない仲間だと思うから Tubal に娘の消息を聞いたのだろう. その「友達」から知らされる情報は Shylock を責めさいなむ. Tubal から娘が一晩に４０ダカットも散財したことを聞かされたときに Shylock は "Thou stick'st a dagger in me"(3. 1. 87)と言うが "stick'st a dagger"という言葉は "cut this flesh from off [Antonio's] breast"(4. 1. 298)を連想させる言葉である. そして "One of them showed me a ring that he had of your daughter for a monkey"(3. 1. 93-94)という Tubal のセリフに答えるときに Shylock が使う "Thou *torturest* me, Tubal"(強調筆者 3. 1. 95)という語は金の用立てを申し込まれたときに Antonio に対して使う "rated me"(1. 3. 99)とか "You call me misbeliever, cut-throat dog,/ And spit upon my Jewish gaberdine"や "foot me as you spurn a stranger cur/ Over your threshold"という言葉と比較にならないほど強い苦痛を表す言葉である. そのような激しい苦痛を表す言葉を使うことはそれだけ Tubal の言葉が Shylock の胸を深く突き刺していることを示唆している.

III

証文を作成するときに Shylock がどれくらい本気で Antonio の命をつけ狙っていたかについては見解が分かれるところである. 一方ではなるほど "merry bond"を提示したのは Shylock であるが，借金の申し込みそのものは Shylock が勧誘した結果ではなく Bassanio と Antonio の方が自ら申し出てきたものである. しかも Shylock はその申し出にすぐ飛びついたわけではなく Antonio が Shylock から金を借りることは彼の仕事を軽蔑した相手

から金を借りることであるという点と，船は板に過ぎないし船乗りは人間でおまけに波や風や暗礁の危険もあるから不測の事態が生じて借金の返済ができなくなる可能性があることについて釘を刺してから契約を結んでいるし，額と期日については Antonio/Bassanio 側の条件を Shylock がそのまま飲んでいる． さらに後に Shylock が私怨を晴らすために法律を利用しようする[21]ことは確かだが逆に言えばShylockは裁判所のお墨付きの範囲内の行動しかしようとしないからAntonioの船が彼の予想通り期限の１ヶ月前に戻ってきたらShylockがいかにAntonioの肉を欲しがったところで殺人未遂事件は起こりようがない．しかもAntonioに多少なりとも契約を遵守しようとする気概があるなら借金の返済が間に合わない恐れが出た時点で即，友人，知人，仲間からお金をかき集めて Shylock に返済することもできたはずであるからだ． とするならば “the bond has evolved itself naturally out of the situation, and its contrivance has at no point involved the necessary intrusion of a demon's malice”[22]という Charlton の指摘もあながち間違いとは言えないように思える．

しかし他方では Antonio と契約を結ぶ前に Shylock 自身が独白で “If I can catch him upon the hip,/ I will feed fat the ancient grudge I bear him”(1. 3. 38-39)と言っている．また Solanio と Salarino と Shylock の会話から船が難破し Antonio の破産が確定した（と思われた）時に Shylock が Antonio の命を狙っていたのは確かであるし, Jessica の話が信頼できるなら Shylock は Antonio が破産する以前から彼の命を狙っていたことになる：“When I was with him, I have heard him swear/. . . That he would rather have Antonio's flesh/ Than twenty times the value of the sum/ That he did owe him.”(3. 2. 284-86)Shylock が Antonio の命を狙い始めた時期に関して Wilkins は次のように述べている： “That [Laban's story] inspired Shylock with the idea of asking for Antonio's flesh as bond is proved. . . by his subsequent return to the idea of Laban's flocks, some seventy lines later[1. 3. 156-60].”[23]

以上の点を考慮すると Shylock が Antonio の命を狙い始めた時期を特定することは難しいが Shylock が本気で Antonio の命を狙い始めたのがどの時点であるにしても３幕１場の Tubal と Shylock の会話がなくても Shylock は裁判で Antonio の肉を正当に手に入れる権利を要求したと思われる． Antonio の破産も Jessica の駆け落ちも直前の Salarino や Solanio との会話の時点で Shylock は既に知っていたし，錯乱した Shylock が “My daughter! O my ducats! O my daughter! Fled with a Christian! O my Christian ducats!”(3. 1. 93-94)とわめく滑稽さも既に Solanio に言及されている． とするなら Tubal との会話はなくても Shylock の行動に変化はなかったように思えるが，それなら何故この場面が必要なのだろうか．

Tubal との会話での新しい要素は娘の散財，特に妻の形見まで売り飛ばしてしまったことを知らされることによって Shylock に加えられるこの上もない苦しみである． Tubal が Antonio の破産と娘の行状を交互に告げて Shylock を舞い上がらせては突き落とす行為を繰り返すことによって Shylock の中で激しい苦しみと自分を苦しめるものとしての Antonio の像が結びつく． Shylock は “stick'st a dagger in me”されたから “cut. . .flesh

from off [Antonio's] breast"しようとし，"torturest me"(3. 1. 95)されたから"torture him"'(3. 1. 92)しようとする．かくしてそれまで観念としてしか存在しなかったAntonio殺し計画をいよいよ実行に移し始める[24]："Go, Tubal, fee me an officer, bespeak him a fortnight before."(3. 1. 99-100)そして決意の臍を固めるために復讐を神に誓う："Go, Tubal, and meet me at our synagogue."(3. 1. 102)

上述のようにShylockにAntonioの命を狙わせる最後の引き金を引いたのはTubalであるからこの劇の最大の悪党はShylockではなく彼を陰で操るTubalだとする論も成り立つ．問題はTubalがShylockを操ることの意義である．Antonioは"lends out money gratis, and brings down/ The rate of usance here in Venice"(1. 3. 36-37)であるからShylockの敵であるばかりでなく同業者のTubalにとっても敵であり，TubalがAntonioの破滅を喜ぶのは充分納得のいくことである．解せないのはShylockをAntonio殺しに駆り立てるために彼をさいなむときにあたかもShylockの苦しみを楽しむかのように彼を喜ばせては突き落とし，喜ばせては突き落とすという行為を繰り返していることである．さらに解せないのはAntonioの破滅はTubalにとっても喜ばしきことなのに彼はあくまで黒子に徹して決して前面には出ず，裁判の場面でもShylockの応援のために駆けつけたりはしないことである．換言するならTubalが汚れ役をShylockに押し付けていいとこ取りをしようとすることである．実際，形勢が逆転して裁判に負けたShylockが財産の半分を没収され，クリスチャンに改宗させられるときにTubalは無傷である．

IV

AntonioとShylockの類似点はしばしば指摘されてきた．貿易商人と金貸し業という違いはあっても２人とも広義の商人であることがその筆頭に挙げられるが，この類似点ゆえ，しばしばThe Merchant of VeniceはShylockのことだと誤解されてきた．[25]他の類似点としてよく挙げられるのが孤独である．Shylockはクリスチャン社会に生きるユダヤ人だから孤独であるがAntonioもBassanioに対して単なる友情を超えた社会的に許容されていない同性愛的感情を抱いているから孤独であり，Shylock同様Antonioも大団円では財産は戻るものの半端者の存在であることは隠せないというものである．[26]この２つの類似点のうち前者はここでは関係ないのでまたの機会に譲ることにして後者について考察したい．なるほどAntonioはSolanioが指摘するようにBassanioへの友情だけが生きる喜びであるからBassanioがPortiaと結婚することを全面的に支援しつつも，寂しさを免れないことは確かである．それに社交的なBassanioと異なりAntonioがふさぎの虫であることは既に開幕場面で彼自ら認めるところである．しかしこれらの類似点にもかかわらずAntonioの孤独とShylockの孤独の間には大きな質的な差異が存在する．

いかにAntonioが孤独であるにしても彼がふさぎの虫に取り付かれていれば彼の憂鬱を心配して"I would have stayed till I had made you merry"(1. 9. 60)と言う人物が存在するし，「Antonioはいい人でない」という評判を聞いたことがないことはShylockも認めるところである．それにAntonioがBassanioを思うほどBassanioがAntonioを思って

いない[27]にしても，Antonio の危機を知ると結婚したばかりの妻を捨て彼の元に駆けつけるし，彼の命を救うためなら妻の命を犠牲にしてもいいとまで公言する． そして Portia も愛する夫の友人の危機を救うために一肌脱ぐし，“Twenty merchants,/ The Duke himself, and the magnificoes/ Of the greatest port”(3.2.278-79)みんなが何とか Antonio を救おうと Shylock の説得を試みるし，牢番までが頼まれたら Antonio を連れ出すほどである． それに対して劇中には Shylock に同情する人物は存在しないのである．

クリスチャンとユダヤ人の対立がこの劇の大きな要素であることは既に議論してきた通りである． Antonio が Shylock を軽蔑するのは Shylock がユダヤ人の高利貸しだからであるし，Shylock が Antonio を憎むのもクリスチャンである Antonio が彼の商売の邪魔をしてきたからである． “Hath not a Jew eyes?”云々のセリフがクリスチャン社会に生きるユダヤ人の悲しみを読者や観客に訴えることも既に指摘した． 問題は Shylock がユダヤ人仲間の Tubal の同情さえも得ることができないことである． Shylock がユダヤ人仲間の同情さえ勝ち得ることができないのは彼が human kindness を蹂躙するからだ．Compassion を軽蔑するから compassion を得られないのだという反論があるかもしれない． [28]なるほど Shylock の compassion はきわめて限定的なものである． しかし既に議論してきたように Shylock は亡き妻に対する愛情は別にしても Lancelot や Jessica に対しても僅かながら愛情を示しているのである． Lancelot が Shylock のことを “Give him a present? Give him a halter!”(2.2.86)と評するのに対して Shylock はよりよい主人に仕えるために自分に暇乞いをした召使のことを “The patch is kind”と評価するだけの優しさを身に着けているし Shylock にとって命の次に大切な財産を盗み，彼の敵であるクリスチャンと駆け落ちをした娘のことを痛罵する一方で娘にはなはだしき裏切りを経験させられた後でまだ娘のことを思いやる心を持ち続けている：“These be the Christian husbands! I have a daughter: Would any of the stocks of Barabbas /Had been her husband, rather than a Christian!”

クリスチャンは loving でユダヤ人は律法を重んじるあまり愛情に欠けるという先入観を持ってこのセリフを解釈するのは間違いである． Shylock が娘の結婚相手にクリスチャンよりも盗人のほうがましと思うのは，なるほどクリスチャンは Bassanio や Gratiano の例から推すに友人の命を救うためにはすべてを投げ打つほど友情に厚いかもしれないが，すべての中に妻をも含む． つまり友人の命と妻の命の選択になったときに妻を犠牲にする者には自分の大事な娘はやれん，たとい社会的地位がゼロ以下の泥棒であろうと妻のことを第一に考えてくれるものに娘をやりたいというのがこのセリフで Shylock が言わんとすることであろう． 博愛主義の観点からするなら Shylock のセリフは利己主義との謗りを免れ得ない． しかしたとい利己主義であろうと娘を思う親の気持ちに変わりはない．

V

限定された稚拙な愛ではあるが Shylock が愛情を示しているのに対して，僅かなりとも Shylock に愛情を示すものは結婚前に Shylock にトルコ玉の指輪を贈った死んだ妻の Leah だけである． 娘にいたっては父の財産を盗んでクリスチャンと駆け落ちしただけで

なく，父の破滅に加担する証言さえするのである：

When I was with him, I have heard him swear
To Tubal and to Chus, his countrymen,
That he would rather have Antonio's flesh
Than twenty times the value of the sum
That he did owe him; and I know, my lord,
If law, authority, and power deny not
It will go hard with poor Antonio. (3. 2. 283-89)

もちろん Jessica のセリフは友のために命を差し出すほどの友情の持ち主である Antonio を救うために私情を捨てたクリスチャンの妻にふさわしい発言と解釈することもできる．しかしそれを認めた上で，娘に裏切られた後で Shylock がまだ娘への思いを抱き続けているのに比して，上に引用した Jessica のセリフはいかにも冷たいという印象を拭い去ることができない． どうしてせめて「父と私では考え方も気質も違いますから私にどれほどの力があるかわかりませんが，今すぐ父のところに駆けつけて私が持ち出した財宝を返して父の心をなだめた上で Antonio 殺しを思いとどまるよう精一杯説得してみたいと思います」と言えないのか．

法廷の場面で Portia は Shylock の要求している訴訟は奇妙なものではあるが筋は通っている，従って Venice の法律は Shylock のやり方をとがめることはできないことを認めた上で Shylock に Antonio 殺しを思いとどまらせるために彼の慈悲に訴えかけて次のように言う：

The quality of mercy is not strained,
It droppeth as the gentle rain from heaven
Upon the place beneath. It is twice blest:
It blesseth him that gives, and him that takes. (4. 1. 180-83)

Portia 扮する Balthazar のこの言葉を聞いた読者や観客はまさに彼らの気持ちを代弁してもらった心持がする． そして "in the course of justice, none of us/ Should see salvation"(4. 1. 195-96)という言葉に耳を傾けず，３倍の金を返したらどうだという示談にも応ぜず，挙句にはこの証文の契約を実行すると Antonio が命を失う恐れがあるから命を保証するためにせめて医者を用意しろという勧告さえ一蹴して証文通りの借金のカタを要求する Shylock の頑なさを見せつけられた観客や読者は Shylock がその頑なさ故に破滅させられるのは当然だと思う． しかしその一方でいかに公爵が「慈悲心」を示して Shylock の命を助けてやり国庫に収めるべき財産の半分を罰金刑に減じてやっても "I pray you give me leave to go from hence,/ I am not well"(4. 1. 391-92)と言って退席する Shylock の姿に読者や観客が哀れみを禁じ得ないこともまた事実である． その１つの理

由は多くの批評家が指摘しているようにShylockの改宗を伴う罰の軽減が果たしてmercyと呼び得るのか疑問だからだ．[29]しかし，それだけではない．いかに未熟で限定されているとは言え，召使についても，娘についても，ユダヤ人仲間についても，彼が示した愛や信頼がことごとく裏切られてきている，換言するなら“[Mercy] blesseth him that gives, and him that takes.”という言葉の空しさを繰り返し味わわされてきたからだ．なるほど亡き妻Leahとの間にだけは愛情の交歓が成立した．しかしその貴重な思い出を妻の形見の指輪と猿１匹を交換することで娘が踏みにじり，ユダヤ人仲間であるTubalは娘の駆け落ちと散財による打撃で既に錯乱状態にあるShylockにその事実を告げることによってShylockの胸に短剣を突き刺したのである．“I would lose all, ay, sacrifice them all. . . to deliver you”(4. 1. 282-83)と言ってくれる「心からの親友」がいればその友のために喜んで死ぬことができるかもしれない．しかし“[Mercy] blesseth him that gives, and him that takes”という言葉の空しさを繰り返し味わわされてきた者が，換言するなら慈悲の何たるかを学ぶ経験を奪われてきた者がどうして慈悲の意義を説く言葉を聞いたからといって急に態度を改めることができるだろうか.

結び

Shylockがどの時点でAntonio殺しを明確に意識したかは議論の余地があるが当事者であるAntonioとBassanioはもとより公爵や貴族のお偉方の説得にも耳を貸さないばかりか慈悲の意義を説くBalthazarの言葉にもShylock自身にとっても有利な借金の３倍返しの申し出も蹴り，極めつけには“Have by some surgeon, Shylock, on your charge,/ To stop his wounds, lest he do bleed to death”(4. 1. 253-54)という忠告すら証文のどこにもそんなことは明記されていないことを理由に一蹴する頑なさを見れば，利息を取らずに必要な金を用立てする申し出をするときにShylockはAntonioたちと友達になりたいと思っているという彼自身の主張を鵜呑みにしたり，[30]Shylockこそ“leaden casket”であるとする解釈は事実を歪めた解釈だと言わざるを得ない．同様に法廷の場面でナイフと秤を用意し，ナイフを靴底で研ぐ明確な脅威としてのShylockの姿が舞台上に呈示されるから滑稽な人物と解釈するにはShylockの存在は重すぎる．さりとてAntonio殺しに駆り立てられたShylockの心の動きをたどってきた観客や読者には“devil”と断ずることにも抵抗を覚える．加えるにShylockを悲劇の主人公とする解釈にも問題が残る．悲劇についてAristotleは次のように定義している：悲劇は「哀憐と恐怖との感情を起こさせる行動の模倣・・・[であり主人公が]人並み以上に善くあり，さうして，正しくあると言ふではない[が]・・・非常な名望と繁栄とを共有している人々の一人[が]・・・罪や悪を犯してでなく，単にある過失誤解から不幸に陥る場合」[31]にそのような感情が催される．もしShylockが自らの死と引き換えにそれでも「天に誓った」ゆえに証文通りAntonio殺しを遂行して処刑されたなら信念を曲げないという点において悲劇の主人公にふさわしい背丈を持ち，彼の破滅は「哀憐と恐怖」を喚起したであろう．しかし“if the scale do turn/ But in the estimation of a hair,/ Thou diest, and all thy goods are confiscate”(4. 1. 326-328)というBalthazarの言葉に怯み要求を取り下げる姿には英雄としての偉大さが欠落していると言

わざるを得ない．それにもかかわらず読者や観客がShylockにひきつけられるのはTubalとShylockの場面がShylockの内面に光を当てているからである．

もしTubalとの場面がなければShylockがAntonio殺しを計画し，敗北するのはユダヤ教対キリスト教というイデオロギーの対立，あるいは商売敵に対する恨みという社会的要因に終始する．しかしTubalとShylockの場面を導入することによって守銭奴で一切の喜びを殺す陰々滅滅たる存在であるかのように見えるShylockにも恋人と愛を語り合う若くて純粋な時代がありかつ今なお亡き妻への思いを抱き続けている人間としての側面が明らかにされる．その人間としてのShylockの妻との思い出を象徴する指輪を娘が猿１匹と交換することで踏みにじり，同郷人のTubalは娘が財産を奪ってクリスチャンと駆け落ちしたことで既に錯乱状態にあるShylockにそのことを告げてShylockの胸に短剣を突き刺す．Shylockの苦しみに加担し，彼をAntonio殺しに駆り立てるものがAntonioとBassanioやその仲間だけでなく，娘や同郷人も含まれていることで，いやむしろ娘や同郷人のほうがはるかにShylockを苦しめることでShylockの苦しみは社会学的な問題，換言するなら私たちの外に存在する問題から１個の人格を持つ人間の根源的な苦しみに変容させられる．*Merchant of Venice*という劇自体は３組のカップルの床入りで終わる喜劇であり，Shylockは４幕１場で退場した後，再び舞台に姿を現すことがないにもかかわらず彼の敗北が観客の心に印象付けられる１つの大きな要因は，Tubalとの場面がShylockの内面に光を当てることによってShylockを単なるユダヤ人の代表から私たちと同じ痛みや苦しみを共有する「私たち仲間の一人」に変化させているからだと言えよう．

注

[1] M. M. Mahood, “introduction,” *The Merchant of Venice*, by William Shakespeare, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 1987) 42-53.

[2] Mahood, 50.

[3] Elmer Edgar Stoll, “Shylock,” *Shylock*, ed. Harold Bloom, Major Literary Characters (New York: Chelsea House, 1991) 98.

[4] Harold C. Goddard, *The Meaning of Shakespeare*, 2vols. (Chicago: U of Chicago P, 1951) 1: 101.

[5] E. M. W. Tillyard, Major Literary Characters, 67.

[6] Leslie A. Fiedler, “These Be the Christian Husbands,” *William Shakespeare's The Merchant of Venice*, ed. Harold Bloom, Modern Critical Interpretations (Philadelphia: Chelsea House, 1986) 72.

[7] Rene Girard, “To Entrap the Wisest,” Modern Critical Interpretations, 97-105.

[8] Richard A. Levin, *Love and Society in Shakespearean Comedy: A Study of Dramatic Form and Content* (Newark: U of Delaware P, 1985) 51.

[9] Graham Midgley, “The Merchant of Venice: A Reconsideration,” *Shakespeare: The Merchant of Venice*, ed. John Wilders, A Casebook (London: Macmillan, 1969) 196.

[10] Lawrence Danson, “The Problem of Shylock,” Major Literary Characters,

274-75.

[11]William Shakespeare, *The Merchant of Venice*, ed. M. M. Mahood The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 1987) 1. 3. 127-29. テキストはこれを使用した. 以下このテキストからの引用は本文中に幕, 場, 行を記すにとどめる.

[12]John Russell Brown, "The Realization of Shylock: A Theatrical Criticism," *Early Shakespeare,* Stratford-upon-Avon Studies 3 (London: Edward Arnold, 1961) 202.

なお, R. Chris Hansel Jr. は Jessica のことを "Shylock's last remnant of human communion"と呼んでいる. Major Literary Characters, 74.

[13] J. L. Halio, introduction, *The Merchant of Venice*, by William Shakespeare, Oxford World Classics (Oxford: Oxford UP, 1993) 46.

[14] Patrick Stewart, "Shylock in *The Merchant of Venice*," *Players of Shakespeare: Essays in Shakespearean Performance by Twelve Players with the Royal Shakespeare Company*, ed. Philip Brockbank (Cambridge: Cambridge UP, 1985) 23.

[15] Leonard Tennenhouse, "The Counterfeit Order of *The Merchant of Venice*," *The Merchant of Venice: Critical Essays*, ed. Thomas Wheeler, Shakespearean Criticism 9 (New York: Garland, 1991) 201.

[16] Alice N. Benston, "Portia, the Law, and the Tripartite Structure of *The Merchant of Venice*," Shakespearean Criticism, 166.

[17] M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry: A Study of his Early Work in Relation to the Poetry of the Time,* A History of Elizabethan Drama 4 (Cambridge: Cambridge UP, 1951) 171.

[18]C. L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy: A Study of Dramatic Form and its Relation to Social Custom* (Princeton: Princeton UP, 1959) 183.

[19]John Palmer, "Shylock" Casebook, 124-5

[20]Mark Taylor は "it is the proper business of both [the Duke in *Othello* and the Duke in *The Merchant*] to allow girls to grow up, whether their fathers will or no."と言っている. Major Literary Characters, 77.

[21] Benston, 178.

[22] H. B. Charlton, *Shakespearean Comedy* (London: Methuen, 1966) 146.

[23] Leah Woods Wilkins, Major Literary Characters, 48.

[24]Ruth Nevo, *Comic Transformations in Shakespeare* (London: Methuen, 1980) 130-31.

[25] 喜志哲雄 「解説」『ヴェニスの商人』ウィリアム・シェイクスピア作, 大修館シェイクスピア双書, 1996 年, 15.

[26]Midgley, 199-207.

W. H. Auden, "Brothers and Others," Casebook, 234.

Girard, 94.

Hans Mayer, Major literary Characters,71.

R. Chris Hassel, Jr., Major Literary Characters, 75. 他

[27] John Russell Brown, introduction, *The Merchant of Venice* by William Shakespeare, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1955) xlvi.

[28]Harley Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare* (London: Batsford, 1972) 393.

[29]Mahood, 18.

Halio, 52-53.

Michael Taylor, introduction, *The Merchant of Venice* by William Shakespeare, The New Penguin Shakespeare (London: Penguin, 1995) 31-32.

[30] Levin, 78.

Goddard, 100.

[31]アリストテレス　『詩学』松浦嘉一訳, 岩波文庫, 1949 年, 83-84.